

人間関係を重視した学校教育改善

—— 互いに語り合える人間関係づくり ——

足利市立東小学校 漆原芳三
高橋知俊
他全職員

1. はじめに

学校教育の最大のメリットは集団学習による児童の人間形成であることはいうまでもないことである。この学校教育のメリットを最大限に生かす工夫を試みたい。

本校は、足利町足利小学校として、明治6年の学制施行と同時に開校し、開校時538名だった児童数が年々増加し、明治15年には分校修業舎を廃止し西校が独立した。そのため、本校は足利小学校東校となった。

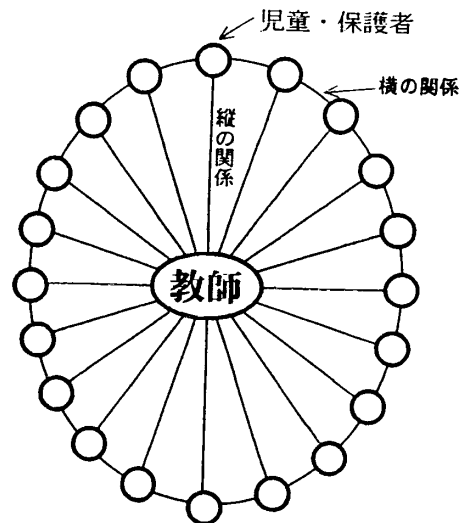
更に、明治30年には柳原に高等小学校を開設した。大正13年には相生町分舎が相生校として独立した。このように適正規模の学習環境を維持する努力を先人がしてきたのである。

しかし、昭和30年代からは人口のドーナツ化現象・少子化等により児童数は減少の一途をたどり、現在では多かった当時の十分の一という現状であり各学年ークラス、しかもークラスの人数も少なくなっている。

そこで、本校では同学年だけでなく、1年生から6年生までの全学年による活動の場を意図的に設定し、より多くの児童とのふれあいの機会をつくるように工夫している。

例えば、縦割り班による全校給食、縦割り班によるふれあい学習、縦割り班による全校遠足等、全校児童のふれあいの場を多くする等に努め、お互いの人間関係の深まりを重視した学校経営の工夫を行っている。

研究主題にせまるために、教師と児童・保護者一人一人との人間関係、つまり、縦の人間関係と、児童と児童、保護者と保護者、教師同士等の横の人間関係を深めることに努めている。



人は一人一人みな違う

2. 基本的な考え方

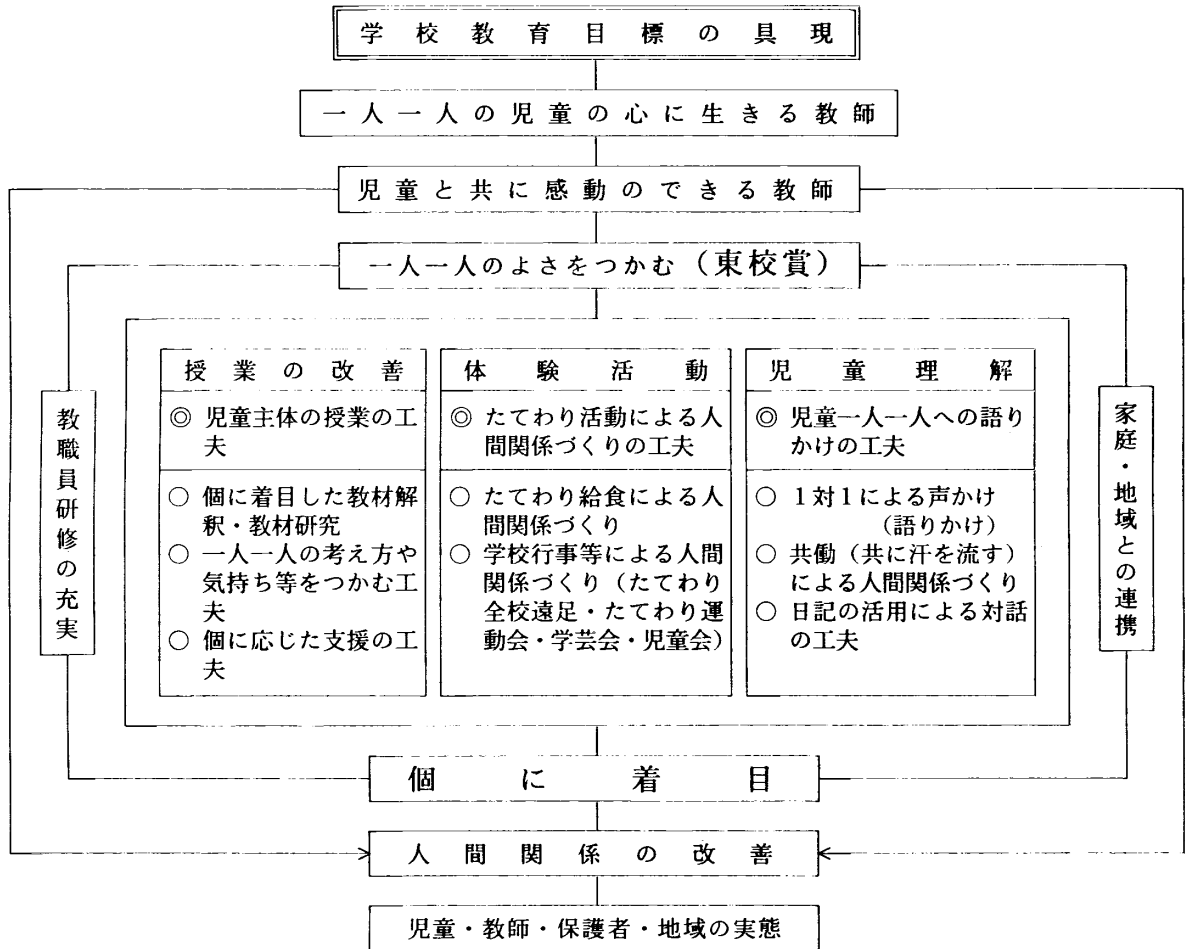
学校教育は教師と児童、教師と保護者、教師と地域住民との信頼関係の深まりに応じて、より効果的な教育ができるものであり、信頼関係を深めることは誠に重要なことである。

一人一人の児童・保護者との信頼関係を深めるためには、「人は一人一人皆違う。」ということ的前提にし、より深く理解することが必要なことである。

そこで、教師が一人一人の児童の心、気持ち、考え方、願い等を知る（つかむ）ための実践研究を、授業・学校行事・日常生活等学校教育全体を通して推進することにした。

具体的には、クラスの不特定多数の児童や保護者に対する「かけ声」ではなく、教師が具体的な児童・保護者一人一人、つまり、1対1による「声かけ」に努め、児童や保護者との話し合う関係から、語り合える関係まで、信頼関係を深める努力をする。

学校教育改善推進構想



3. 具体的な方策

(1) 授業の改善～児童全体に教える授業から、児童主体の授業への工夫

明治以降の我が国の伝統的な教育方法は、端的に言って、追いつき、追い越せの教育であり、立身出世主義の教育方法であった。つまり、我慢と頑張りの教育であった。

そこにあっては、全ての子供を一定の目標に到達させることが、何よりも重視され全てを「そろえる」教育であった。この「そろえる」教育にあっては、物差しは一つである。すなわち、そろそろ速さと効率である。それによって、全てが評価されたのである。「そろえる」ことは、悪いことではないが、問題はそろわない子供である。

今、学校教育に求められていることは、どの子も、その子なりのよさを見だし、それをバネにしてやる気と自信を育てることである。

それぞれに違っていい、違うことが、素晴らしいと考える「違いを認め合う」教育の推進が必要である。「人は皆同じだが、一人一人違う。一人一人違うが、皆同じ。」これを「個に着目した。」授業改善の原点としたい。つまり、教師は教える工夫ではなく、児童一人一人の実態をよりキメ細かく知る努力をすることにより児童主体の授業、一人一人が自分の課題を明確にしながら意欲的に学習に取り組む授業の工夫をする。

授業は常に、教師と児童、児童相互の人間関係を基底におくべきであり、教師から児童への一方通行ではなく、常に相互の交流が大切である。

授業前の指導計画・指導案等は児童の個性理解、教材研究等を踏まえた、いわば、教師の力量を結集した授業の見通しではあっても、展開過程における一人一人の児童の反応を見通すことは不可能なことである。この児童の反応を無視して一方的にあらかじめ用意した自分の教えたい内容を児童に理解させようと努力する授業では、児童に意欲的、積極的な学習態度を身につけさせることはできない。

児童は、姿勢を正しくして教師を見つめ、教師は厳格な表情で、その教師なりに深めてきた教材研究の結果をふまえて、多種多様な教材教具を活用しながら熱心に説明をする。目標は、常に「全員到達・全員をそろえる」である。教師の説明を聞かずに、隣の席の友達と話をしたり、よそ見をしたり、座席を離れたりと、厳しく叱られる。説明をしながら、一人一人の子供に視線は向けられるが、それは、子供の理解度や子供の気持ち等を知るためではなく、真面目な態度で聞いているかどうかを確かめるためであり子供が学習態度を崩さないための威圧的な視線である。

このような授業では、知識を一方的に与えられる児童の姿は見えても、自ら学ぼうとする意欲的、積極的な児童の姿は見ることができない。

つまり、常に一人も落とさず全体の児童に理解させたい、全体の児童をそろえたいという考え方で授業が展開されており、具体的な「一人一人の児童と教師の関係」という点が見えて来ない。そのため、授業過程における一人一人の児童の考え方や気持ち等をつかむ努力は見られず、一人一人の児童のよさを生かす工夫とか、特性を生かした児童が主役の主体的な学習場面は誠に少ない。

授業は、一人一人の児童が意欲的、主体的に学習するのを教師が支援をするものであり、教師は主役ではなく、児童が主役でなければならない。

一人一人の児童を、意欲的に学習に取り組ませる為には、教師は一人一人の児童の知的な理解度をよりキメ細かく把握することは、いうまでもないことであるが、教師が児童の情意面を大切にすることは、更に重要なことと思われる。

そこで、本校では一人一人の児童の情意面を大切にしたいということから、「学習に感動させる工夫」というテーマで一人一人の児童の気持ちや考え方をつかむ工夫と、一人一人の気持ちや考え方をつかむための児童と教師の、より良い人間関係づくりに努めている。

具体的には、机間指導、ノート指導、日記指導等と日常生活における個に着目し、意図的に1対1によるふれあいの機会を多くすることにより、まず、つかむ工夫、つかめる力・感性を磨く努力をしている。

(2) 体験活動～たてわり活動による人間関係づくりの工夫

① 学校行事の見直しと改善～小規模校における学校行事のねらいの確認

学校行事の目標や内容は指導要領に示されているが、本校では、本校の実態に即したそれぞれの行事の目標を明確にし、全職員で共通理解を図りながら行っている。

例えば、運動会などは、学年一クラスということでクラス対抗形式をとることはできない。そこで本校では、縦割りによる給食班を単位としていろいろな演技や競技を行っている。全校リレー等も給食班を単位として行う。そのため、事前のバトンタッチの練習なども、昼休みや放課後等を利用し、5・6年生がリーダーになって行い、上級生が下級生に親切に指導している場面を多く見かける。

また、高齢者との「ふれあい活動」も縦割りで行うため、本校の上級生と下級生の温かい人間関係は、好評である。特に、下級生の祖父母からはお褒めの言葉、感謝のお便り等を戴くことが多い。

② 日常生活における先輩と後輩関係の改善～がき大将の養成

昔は、「がき大将」という遊びのリーダーがいて、特に、年下の力の弱い子供は大切にされ、「弱い者いじめ」は、「がき大将」が見逃さなかった。そして、けんかをするときも、卑怯な手段は使わないというルールがあり、危険なけんかをすることも無かった。

つまり、遊び方・遊びのルールが先輩から後輩へと引き継がれた。ここで、大切なことは、先輩に親切にされた体験である。私たちが小学校1～2年生の頃、当時の「がき大将」に親切にされたことが、今でも思い出すことができるし、当時の児童の多くは上級生になったら下級生に親切にしなければならないと思っていたに違いない。

このように、上級生に親切された体験や「弱い者いじめは、卑怯だ。」という先輩の言動が、下級生に引き継がれたのである。

最近「いじめ」が、大きな社会問題になっているが、「いじめ」を無くす対策、「いじめ」を取り締まる対策を考えても、大きな効果は期待できないものと思われる。

「いじめ」を取り締まるというような受け身の対策ではなく「弱者を思いやる心を身につける。」という、積極的な対策が重要なことである。

そこで、本校では「がき大将」、つまり、縦割りグループのリーダーの育成に努めることにした。

これが前述の給食班の班長・副班長である。班長や副班長は常に、班員全員に目をかけているが、特に、1年生に対しては実にキメ細かい配慮をしており、配膳・後片付けは勿論のこと、食べ方の指導もしている。教師が給食指導をする必要はほとんど無いほどである。

1年生の入学当初等は、休み時間や昼休みなども自分の班の1年生のめんどうを見てくれる上級生の姿を良く見かけた。また、多くの1年生の保護者から、給食班の6年生が親切にしてくれるので、学校が楽しいというので、ありがたいという声を耳にしている。

縦割り遠足についても、各グループの遊びの内容を見ても、1～2年生が楽しく参加できる遊びを多く見ることができた。その遊びの内容は昔、私共が上級生と一緒にしたことのある遊びが多いことに驚かされた。



たてわり遠足



たてわり給食

つまり、昔の遊びは同年齢集団の遊びよりも異年齢集団の遊びの方が多かったのである。

遊びも必要に応じて子供達が工夫することであり、与えることではないことも痛感させられた。

また、その「がき大将」リーダーを中心にした遊びの中では、常に、弱い立場にある下級生に対する上級生の温かい配慮が感じられ、同じ力関係にある友達との争いは見かけたが「弱い者いじめ」は全く感じられなかった。

(3) 児童理解～児童一人一人への語りかけの工夫

教師が児童や保護者と話し合うことはできても、語り合うことはなかなかできないことである。その一番の理由は、教師は児童を評価しなければならない立場にあるからである。

語り合う関係の条件として、両者が対等な立場に立たなければならない。そのため本校では、まず教師と児童が対等に立つ場をつくるように努めている。

4. 保護者・地域との連携

本校のPTA活動のねらいは、「思いやりのある児童の育成」ということで、次の三つの具体目標の具現に努めている。

- ◎ 場を正す。・・・（心をみがく清掃活動，身の回りの整理整頓）
- ◎ 時を守る。・・・（計画的な生活態度の育成，集団生活の基本）
- ◎ 礼をつくす。・・・（明るいあいさつ，気づきのこころ，人間関係の基本）

つまり，基本的な生活習慣としての「人間関係」の育成を基本において，家庭・地域・学校の三者が連携し，一貫性のある教育の推進に努めている。

(1) 保護者・地域との連携の手段としての学校だより「とうこう」と学年だよりについて

本校では，保護者・地域との連携の手段として，東小学校が新築移転した昭和57年度から，学校だよりとしての「とうこう」を発行している。（平成7年12月現在～1137号）

現在では，「とうこう」の発行は教頭が担当し，各学年では「とうこう」の内容を受けて，更に具体的な内容についても触れるようにし，保護者との具体的な連携をはかる手段としている。

なお，保健関係については，養護教諭が各学年に関する資料を提供し，学年だよりで保護者に連絡したり，必要に応じて，全家庭に「保健だより」として連絡し，保護者との連携を図っている。

学校だよりとしての「とうこう」は，各家庭だけではなく，民生児童委員協議会や育成会にも配布しており東校地区の全家庭に「回覧」されている。

家庭（保護者）・地域との連携を図るうえで，特に留意している点は，学校経営方針・努力点・具体策等の「一貫性」であり，ややもすると，単に学校・学級の情報を家庭や地域に多く流すことにより，学校の基本的な方針や努力点等が，見えなくなってしまう危険性があるということである。

本校では，「一貫性」を強化するための一つとして，「報告・連絡・相談」，つまり「ほうれんそう」を合言葉に，実践に努めている。

特に，「学年だより」や「保健だより」等については，各担任や養護教諭は教頭・教務と相談しながら校長の学校経営方針・学校としての一貫性を踏まえて内容を検討し各家庭に配布するように努めている。

東小学校だより 通算第1136号

★ とうこう

平成 7年度 第 28号 発行人 漆原 芳三
発行日 平成7年12月11日 発行所 足利市東小学校
〒326 足利市伊勢町4-1 ☎0284-41-2610

みんなで一人を大切にしたい

学芸会は楽しかったですか。
クラス全員がひとつにまとまり、本気になって演じた劇や歌等は観客の心を打ちました。

本気になって練習（学習）してきた人にとっては充実感があり、忘れられない思い出ともなることでしょう。

ひとつの劇には、主役・脇役などいろいろな役割がありますが、それぞれの役割を果たすことの大切さを、劇の練習を通して体験することができたことと思います。

クラスの一人一人がクラス全員のことを考えることは、なかなかむずかしいことです。しかし、一人一人がクラスの全員のことを考え、また、クラス全員で一人一人のことを考えることが、素晴らしいクラスをつくるためには必要なことなのです。

心を合わせて素晴らしい劇、素晴らしい合唱ができたのですから、きっと、より素晴らしいクラスになることと思います。

クラスの一人一人が、時には主役になり、時には脇役になり、みんなで協力（力を合わせて）して、一人一人が楽しく日々過ごせるクラスにしたものです。そのようなクラスにはいじめ等で苦しむ人はいません。

クラスの一人一人が交代で主役になれるクラスが楽しいクラスです。

学校長 漆原 芳三

新学区編成といじめの話

家族参観日11日（火）

明日は家族参観日です。東校児童の学校での学習の様子を、どうぞ、ご覧ください。家族参観のあとは、過日、通知差し上げましたように、次のことを予定しております。多数の方々のご参加をお待ちしております。

① 新学区編成についての話

市教育委員会と校長会共同作成の「新学区編成について」の資料を配布し、これに基づいて説明いたします。

② いじめについての教育講演会

東校卒業生であります、日本弁護士会副会長の小沼沈一郎先生のいじめについてのご講演です。はじめに子どもたちを対象にしてお話、続いて、保護者等に対してのお話となります。

なお、この時、他の学校の保護者の方々も参加されますのでご承知おさください。柳原小、西小、大橋小の保護者の方々です。

「しない・させない・ゆるさない」

【いじめ】

「とうこう」前号でいじめについて話をしました。いじめは個人の問題ではなく、みんなに関わる問題なのです。だから、みんなの力でなくすことが必要なのです。いじめは人間として絶対に許されないことです。いじめはいろいろな形があることはお話しましたが、軽い気持ちで言った言葉でさえも相手を傷つけることもあるのです。相手の立場（心の中の様子まで）を考えられるよう一人一人が、常日頃、気をつけていきたいものです。

いじめを「しない」「させない」「ゆるさない」を合い言葉としていじめをこの社会から完全に無くしていきましょう。



パーソナルコンピューターで学習

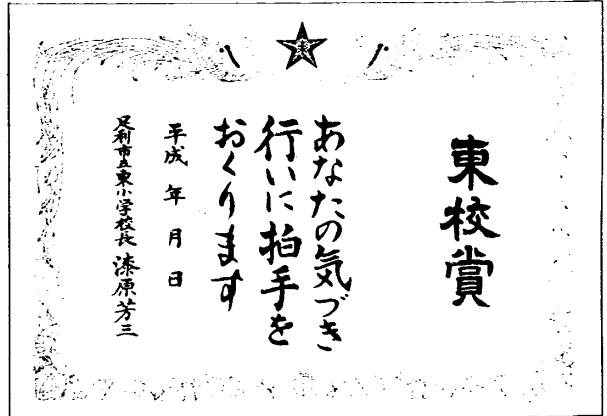
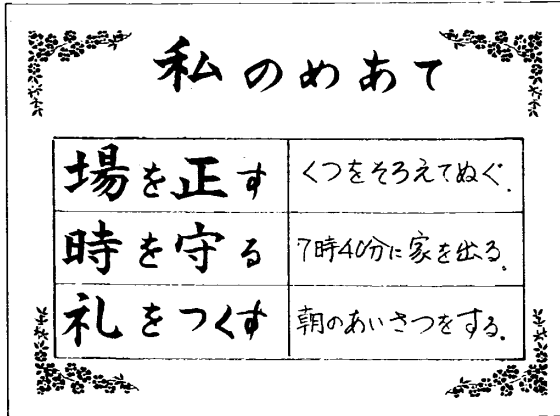
本校には11台のパソコンがあります。パソコン室に設置され授業で活用しています。児童の学習を効果的に進めるためにパソコンを活用しているのです。国語、算数、社会、理科、音楽等と多くの教科に活用しています。全学年が使用し、児童全員が簡単な操作ならすることができます。子どもたちの学習は教科書とノートだけでは成り立ちません。指導者は児童の学習効果をあげるために、それ以外のものをいろいろと取り入れています。そのひとつがパソコンなのです。指導者自身、さらに研修を進め、今後も積極的に活用していく予定です。



(2) 私のめあてと「東校賞」について

前述の「場を正し、時を守り、礼をつくす。」の三つのめあての具現の一つの手段として、児童一人一人が具体的な「私のめあて」を、本人を中心に保護者・担任等と相談しながら決め、自分の家の机の前等に掲示し実践に努めている。

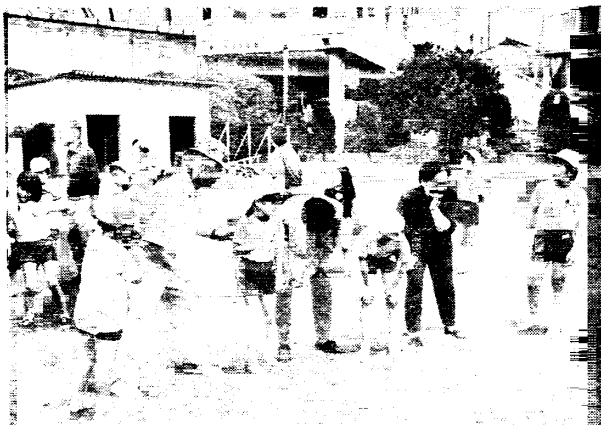
なお、学校では、この三つの基本的な人間関係（基本的な生活習慣）と一人一人の児童のよさの把握という視点から、児童の言動を担当、校務員、事務職員等全職員で把握し、推薦カードで校長に具申し、校長が「東校賞」を授与し、認め励ます手段としている。



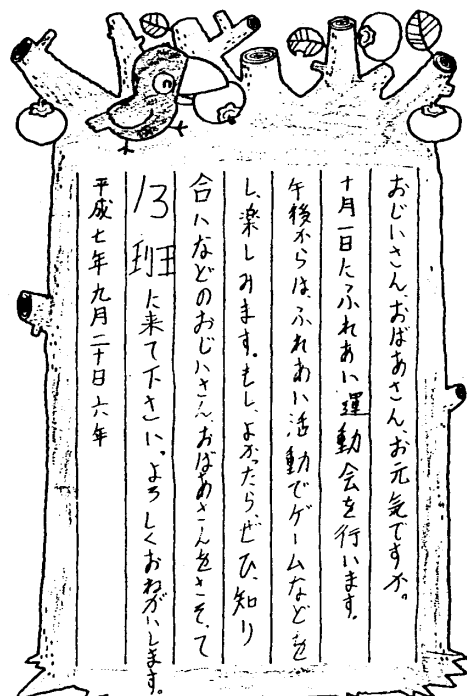
(3) ふれあい活動について

東校地区は、高齢者の率が約25パーセントと市内では、最も高齢化の進んだ地域である。そのため、児童の教育に高齢者のご指導・ご支援を戴くという点では、誠に恵まれた地域である。

また、今後の新しい教育の視点からも、高齢者との連携を密にした教育は重要であると考え、高齢者との心のふれあい活動を通して、本校の教育の実態や方針・努力点等を理解して戴くとともに、具体的な一人一人の児童と具体的な一人一人の高齢者との結び付きを図るための活動を行っている。



高齢者とのふれあい活動



高齢者へのお手紙

おてかみありがとうございます
 あなたもおげんきでまいにちをす
 なたしもげんきでまいにちをす
 ござりまするからせむかやいであつ
 こうけいそくをさい、わたしもげんき
 でおんがんにがきてくれるのでとてほ
 のしいです、いらいなことをきか
 りたいもいところですよ、おが
 からおあてがおいなないてありが
 ちう、まにあらうようしくとゆ
 さい、まにあらうようしくとゆ
 さようなら

高齢者からのお手紙 2年生へ

栃木県足利市
 伊勢南町四一
 足利市五東小学校
 六年生皆様
 六年生皆さんお元気
 ですか。この間は運
 動会にお招きいただき
 とても楽しい一日をありが
 とうございました。みんな元気で
 頑張ってもらって、上下級生の
 みんなと楽しく過ごして、成
 長を促してもらった。どうぞ、これか
 らも、おもしろい心算大切にい
 て、残り少ない小学校生活を
 楽しんでください。おが
 さん、おあてがおいなないてあり
 がちう、まにあらうようしくとゆ
 さい、まにあらうようしくとゆ
 さようなら

6年生へ

5. 職員同士の人間関係について

人間関係を重視した学校教育改善で、最も重要なことは、言うまでもなく、私共教職員自身の人間関係の改善であると考え、職員同士の人間関係を重視している。

(1) 努力目標・具体目標等についての共通理解

同じ目標に向かって、お互いに協力し合い、支え合い、努力し合う中で、お互いの人間関係は深まり、改善されるものと考えている。

例えば、昨年と同じ学校行事をするにしても、目標や努力点等についての検討・確認に重点を置き全職員の共通理解に努めている。

本校は、職員が少ないために一人一人の果たす役割が大きく、職員同士の人間関係が誠に重要であり、お互いに、相手の立場（特に、主任の立場）を考慮しながら自分の役割を果たすように努めなければならないのである。（各主任を全職員で支えなければ初期の目標を達成することはできない。）

また、各種の現職教育を通し、同じ目標に迫る中で教職員相互の人間関係の改善に努めている。

(2) 週指導計画の活用

週指導計画の活用の一つとして、校長と一人一人の職員との相互理解の手段としている。

校長は、毎週一回は「週指導計画」に目を通すようにし、職員一人一人の学校教育についての具体的な考え方や実践・反省等の理解に努め、一人一人の職員の立場を考慮しながら、同じ方向に向かい努力することによって人間関係の改善を図るようにしている。

(3) 報告・連絡・相談について

職員間の「報告・連絡・相談」は誠に重要ではあるが、具体的に、いつ・どこで・どのように、ということになると容易なことではない。そこで、本校では、次のような話し合いの場を意図的・計画的に実践している。

しかし、学校事故や急を要する問題については「速く、正しく、温かく」をモットーに、「ほうれんそう」に努めている。

◇ 全職員による「朝の打ち合わせ」、管理当番が司会し、連絡事項等については前以て板書しておく。

- ◇ 全職員による「職員会議」，教頭が司会し，事前に企画委員会で検討してから，全職員に連絡・報告をしたり協議したりする。
- ◇ 代表による「企画委員会」，学校運営に関する企画を検討し，必要に応じて職員会等で検討し実施する。
- ◇ 代表による「研究推進委員会」，学校研究課題・現職教育課題等の推進を図る。
- ◇ 学級担任による「学級担任会」，学級経営等に直接関係することについて協議し実践している。

6. お わ り に

- ◇ 人は皆同じだが 一人一人皆違う，一人一人皆違うが 皆同じである。
この世の中に全く同じ人がいたらどうでしょう。似ている人はいても，全く同じ人はいない，もし全く同じ人が大勢いたら大変なことになってしまう。
人間は一人一人皆違う，ということは知識としては分かっていることであるが，知識としてではなく更に認識を深めることが，人間関係改善の基本であることを強く感じた。
- ◇ 人は，誰でもその人なりのよさをもっている。お互いに相手のよさを見いだす努力をしなければ，より良い人間関係を作ることはできない。
我々教師が一人一人の児童の欠点を直す努力をすることも大切な任務かもしれないが，一人一人の児童のよさを見つけ，そのよさを伸ばす努力をすることが，一人一人の児童と教師の人間関係・信頼関係を深める上で最も大切なことである。
- ◇ 教職員と児童，教職員と保護者，教職員同士の出会いを大切にすることも，人間関係改善そのものであるように思われる。
我々教職員は多くの児童や保護者との出会いがあるが，この出会いを本当に大切にしているだろうか，教師が「一期一会」の心で児童に接し，教師と児童が本気になって学習に運動に取り組むことにより，互いのよさを認め合うことができ，お互いの信頼関係は深まり，教師の心に生きる児童，児童の心に生きる教師になれるものと信じたい。
今後とも，一人一人の児童のよさの把握に努め，人間関係を重視した学校教育の改善に努めたいものと思う。

評

生涯教育の立場に立った、市民参加による「足利市の教育目標」第3次具現状況評価の結果では、人生各期において社会連帯感にかかわる実践状況が低下してきており、児童期においても例外ではありません。また、昨今の社会の風潮として、青少年の規範意識がより自己中心的な傾向に加速されており、心豊かな連帯感あふれるまちづくりにおいて危惧されています。

このようなとき、東小学校における学校教育改善への取り組みは、学校教育への根源的な問いかけであり、教育に従事するものとして再認識しなければならない基本的なものです。

学校教育改善の基本的な考え方として、教師と児童・保護者、さらに地域住民との「人間関係を深めること」「信頼関係を深めること」を基盤に据え、児童一人一人の多様性を認識し、児童一人一人それぞれちがいがあがり、固有の特性を持ちあわせており、その子なりのよさに着目することに教育の展開の原点をおいています。

この考えのもとに、授業における「学習に感動する」児童を目指した改善、「たてわり活動」とそのリーダーとなる「がき大将の養成」に力点をおいた体験活動における工夫、そして、児童一人一人と教師が1対1での声かけ・語りかけや教師の率先垂範による共働や日記の活用による対話を重視し、教師の心と児童一人一人の心とのつながりを大切にしたい児童理解などについて、具体的な取り組みについてとその成果が確認されており、具体的、実践的な工夫改善が特筆されます。

学校は、人が人となる意図的計画的な営みの場の一つであり、教師は、子供の心の動きに反応するのではなく、子供の奥深い心の営みに感応することが大切であります。これからの学校教育には、心の教育、社会性の育成などの要請が、ますます大きくなると考えられ、東小学校の学校教育改善へ向けての様々な教育実践は大きな示唆を与えてくれるものであり、今後とも、研究を継続され、さらに実践を積み重ねて、研究が深められることを期待しています。